



salut

VOL.100

つくりあげられたものは、滅びてゆく。あなたがたは、熱烈に、なすべきことを完成しなさい。
『パトリック・バーナ』より



應典院寺町倶楽部主催事業

グリーンタイム

失った大切な人に思いを巡らせながら、一人でゆっくりと過ごす時間。手紙や作品作りなど、様々なワークから自分に合ったものを選んでいただけます。

● 11月14日(土) 13:30～16:00
※お茶会 15:30～16:00
参加費 / ¥500
会 場 / 研修室B
問合せ / grieftime2009@gmail.com (グリーンタイム事務局)
06-6771-7641 (應典院事務局)

いのちと出会う会

毎月第3木曜日(8月・12月・1月休会)
＜應典院研修室＞
参加費 / 一般¥1,000 應典院寺町倶楽部会員・学生¥700
● 11月19日(木) 18:30～20:00
第145回「長女を身体、知的重複障がい児として授かって」
話題提供者: 田川康吾さん(近畿信行会顧問)
元陸軍幼年学校を出られた田川さんは83歳。結婚の翌年生まれた長女のむつみさんは麻疹がこじれて心身重複障がい児となられて今55歳。海外勤務が多かった田川さん、奥さんはどんなに心細い気持ちで育てられたことか。定年退職後、田川さんは重度障がい者の会の事務局長などを歴任されました。重度障がい児をもつ家族の一員としてご家族がどんな思いで育てられて来られたかを語っていただけます。

まわしよみ・イスラーム

～宗教記事を読み解く連続会 第5回
イスラームについて、あるいは一連のIslamic Stateについて書かれた記事(新聞、雑誌等)を持ち寄り、ご参加ください。申込は不要です。
進 行 / 山口洋典(應典院寺町倶楽部事務局長)
秋田光軌(浄土宗大蓮寺・應典院)
● 12月3日(木) 19:00～21:00
参加費 / 無料
会 場 / 研修室B
問合せ / TEL 06-6771-7641 (應典院寺町倶楽部事務局)
協 力 / NPOそーね

應典院寺町倶楽部協力事業

詩の学校

詩ってどうやって、つくるんだろう。ひとりで詩を書いているけど、誰かに読んでもらいたい。そんなあなたのための「詩の学校」です。

● 11月4日(水) 19:00～21:00
12月9日(水) 19:00～21:00
参加費 / ¥1,000
会 場 / 研修室B
問合せ / poemschool@kanayo-net.com
※筆記用具、ノートはご持参ください。

放談会 伝統の語りと私たち

(オープン台地vol.6参加企画)
能や落語、節談説教など、日本でさまざまに育まれてきた「伝統の語り」。現代に生きる私たちは、そこから何を学ぶことができるのでしょうか。観光家の陸奥賢さんをガイド役に、ともに語り、遊びます。
● 12月5日(土) 17:30～18:45
参加費 / 無料
会 場 / 気づきの広場
定 員 / 15名
申込み / <http://bit.ly/dentou1205>
問合せ / TEL 06-6771-7641 (應典院事務局)

セッション! 仏教の語り芸～伝統VS創造

古来から、日本人は仏教の語りに心を震わせてきた。死者の鎮魂、弱者の嘆き、そして仏の讃歎……。他界から響く声とパフォーマンスが、あなたの五官を刺激する。
● 11月25日(水) 18:30～「教えを語る」
ゲスト / 直林不退(節談説教)、チームいちばん星(現代説法)
● 12月2日(水) 18:30～「弱者を語る」
ゲスト / 桂文我(落語家)、上田假奈代(詩人)
● 12月5日(土) 14:00～「死者を語る」
ゲスト / 安田登(能楽師)、玉川奈々福(浪曲師)
参加費 / 当日¥3,000 前売一般¥2,500 前売学生・会員¥2,000
会 場 / 本堂ホール
申込み / チケットぴあPコード630-950
TEL 0570-02-9999
問合せ / TEL 06-6771-7641 (應典院事務局)
共 催 / 練心庵

自分感謝祭

あなたのこの一年には、どんな思い出がありますか。ともに祈り、ともに誓い、あなた自身を供養する「自分感謝祭」。
● 12月23日(水) 18:00
参加費 / 無料
申込み / <http://bit.ly/kansya15>
※終了後、年忘れ忘年会があります。参加される方は参加費1,000円、食料品1品をご持参ください。

コモンズフェスタ2016

【会期: 2015年12月18日(金)～2016年1月24日(日)】
「コモンズフェスタ」とは1998年から應典院にて開催されているアートと社会活動のための総合文化祭です。毎年掲げられた固有のテーマに即し、各種トークイベント、演劇、展示、ワークショップが展開されます。
(2015年12月開催分のみ掲載)

演 劇

ツキノヒカリ～満月動物園第貳拾六夜～
昨年のコモンズフェスタより始まった、死神シリーズ[観覧車編]5連作の最終話。観覧車倒壊という架空の重大事故を舞台に、同じ観覧車の別々のゴンドラに乗った人々を描く一話完結型のメルヘン・ファンタジー。

● 12月18日(金) 19:30
19日(土) 15:00 / 19:00
20日(日) 11:00 / 15:00
会 場 / 本堂ホール
料 金 / 一般前売¥3,000 一般当日¥3,500
※19日(土)15:00の回、20日(日)11:00の回は保育があります。
申込み / <http://www.fmz1999.com/>
問合せ / fmz@fmz1999.com

会いたくて会えなさすぎるあなたたちへ
～ Baghdad cafe the 16th performance～
とある劇団の最終公演。脚本・演出をする彼女は突然失踪した。「不在」をテーマに劇団内部の人間関係を生々しく描くことで、日常にある人と人とのつながり・やりとりを出す演劇作品です。

● 12月25日(金) 19:30
26日(土) 14:00 / 19:00
27日(日) 13:00 / 17:00

会 場 / 本堂ホール
料 金 / 当日・前売¥3,000 学生割引¥1,800
申込み / <http://www.gem.hi-ho.ne.jp/baghdadcafe/>
問合せ / baghdadcafe2003@gmail.com

24時間トーク

如是我聞vol.4～是の如く、我聞けり～
毎年恒例の24時間トーク企画です。今年も劇作家・岸井大輔と観光家・陸奥賢が時間感覚を忘れて聞き、語ります。一体、どんなトークが展開するのか! 途中入退場可。深夜でも出入り自由です。

● 12月24日(木) 18:00～12月25日(金) 18:00
会 場 / 研修室B
料 金 / ¥500
ホスト / 岸井大輔(劇作家)、陸奥賢(観光家)
ゲスト / 齋藤桂太

※各プログラムの詳細・お申し込みはホームページ
(<http://bit.ly/cfesta2016>)をご参照ください。

應典院公演情報

星みずくプレゼンツ 「灯屋・うまの骨」 ● 11月20日(金) 19:00 21日(土) 14:00 / 19:00 22日(日) 14:00 料 金 / 前売一般¥3,000 前売学生 ¥2,500 当日一般¥3,500 当日学生 ¥3,000 問合せ / 090-3822-8459(み群)	グルボ・デ・マロ 「こちら、ラヂオURASHIMA放送局」 ● 11月27日(金) 19:00 28日(土) 14:30 / 19:00 29日(日) 14:30 料 金 / 前売¥2,300 当日¥2,500 問合せ / 06-6653-2970	studio D2 「鵬外の怪談」 ● 12月11日(金) 13:00 / 19:00 12日(土) 13:00 / 18:00 13日(日) 13:00 料 金 / 前売¥2,800 当日¥3,000 学割¥2,500 問合せ / 080-4800-0117(加藤)
---	---	---

outenin 應典院寺町倶楽部 TEL:06-6771-7641 FAX:06-6770-3147 info@outenin.com <http://www.outenin.com>

應典院寺町倶楽部は1997年5月に発足し、非営利市民活動の基盤づくりと活性化を促し、コミュニティの健全育成を図り、創造性豊かな地域社会の発展に寄与することを目的に活動しています。寺院空間を活用した文化・芸術活動のサポーターでありパートナーである方々の参加を広く呼びかけ、随時入会を受け付けています。(会費・寄付は郵便振替口座「00900-2-122125」へお願いします)

「砂嵐」と聞いて何を想像されるだろう。先般、テレビのアナログ放送終了を思い起こす機会があった。2011年7月に東北地方を除き地上デジタル化された今、もう放送が受信されないときに現れた、あの「ザー」という画面を見ることは稀となった。ともあれ、あれを「砂嵐」と呼んだ人の感覚は繊細に思う。時代の変化は細かく表現にも変化を及ぼす。VHS方式などテープが録画の主力だった頃の機械には「巻き戻し」と呼んでいたスイッチは、今や「早戻し」である。つい先日「なぜ写真は枚という単位で数えるのか」を疑問に思う人がいるという記事を目にした。確かにデジタルカメラ全盛の今、焼き増しという概念も含め、紙を数える感覚は伴わなくて当然なのだろう。秋から冬へと開催時期を変えた「コモンズフェスタ」の企画会議が進む中、1998年、つまり第1回の記録映像を見る機会を得た。実行委員長の橋本義郎さんが当時の素材をブルーレイに焼いてお持ちくださったためだ。開催記念コンサートの場面で、橋本さんの司会のもと秋田光彦住職が挨拶を述べている。「共に水をやり、花を育てよう」。

懐かしい映像は、イズが目立つものだった。しかし明瞭に記録された音声は、その場面への想像力を駆り立てるに余りあるものだった。特定の誰かのものではなく、しかし誰でも勝手気ままに使ってはならない、それがコモンズである。当時の場を映像で追体験し、共有できる財産を共に祝う場の意味を再確認した。

(編)



分かち合いで広げる
情報・発想・人脈

今年もまた、総合芸術文化祭「 commonsフェスタ」の企画が進められています。発端は應典院が再建された翌年、ある写真展の企画が持ち込まれたことでした。その結果、写真展開催にあわせて複数の企画が同時期に開催されることになりました。その翌年、1999年も同じように実行委員会形式で企画運営がなされましたが、2000年から2003年までは外部からプロデューサーを招き、企画調整が進められることとなりました。

その後、2年間の休会の後、2006年度からは事務局主導での実施でしたが、再び2012年度より実行委員会形式での企画運営となっています。先般、98年度の実行委員会の橋本義郎代表に当時の映像をお持ちいただき、懐かしんでいます。あれから17年。今年もまた8月より月1回の頻度で集まっています。互いの情報、発想、人脈を持ち寄り立案中の「 commons」つまり「共有の財産」の分かち合いの場、ご期待ください。

commonsフェスタ2016展示作品の公開制作と上映会が、10月17日にパドマ幼稚園で開催されました。今年度の招聘作家である演出家の武田力さんによる今回の作品「そらには、やんわり、うかんでる」は、与えられた質問を手がかりに、子どもたちの語りと砂遊びの様子から、「まち」と「子ども」と「死生観」を細かくプログラムです。



映像作家の川村麻純さんにもご協力いただき、前半は子どもたちを被写体にした撮影を、後半はその映像の上映会を実施し、おとなの方も交えたトークを行いました。今回の映像は1月9日から始まる展覧会で上映いたします。

まちと子どもと死生観

次世代に伝えるメッセージ



第2回大阪短編学生演劇祭が9月26日、27日に開催され、大学生による4劇団と精華高校演劇部の合計5団体が参加しました。上演時間を30分に変更した事で、短い時間に織りなされる物語は、非常にシンプルながらストーリー展開となりましたが、それぞれに個性を感じさせる作品群でした。

今年から應典院寺町倶楽部が共催として加わり、審査員が昨年より増えたことで、作品に対して多くの意見が上がりました。中には厳しいコメントもありましたが、若い次世代の成長につながるがらと願っています。最優秀賞には「劇団かまとと小町」が選ばれました。



子どもとアートとの出会い

去る8月29日、30日に、キッズ・ミート・アート2015」が應典院を中心として開催され、延べ500名以上のおとなと子どもたちが参加する取り組みとなりました。

（以下KMA）は、かねてよりパドマ幼稚園との縁があったからの呼びかけで2013年に開催したことがきっかけです。今年も初年度と同じく、城南学園、パドマ幼稚園、應典院寺町倶楽部の三者連携による、地域開放型の企画として開催いたしました。

2013年度から今年度までの3年間を振り返ると、初年度のKMAでは、「ようこそ！表現の道具箱」という副題の通り、道具箱を床

が探す1年となりました。2年目の2014年度は、前年度に探した意味を丁寧に繋ぎ合わせ、現代美術の作家たちと共に創り上げた演劇、絵画、クラフトの小規模なワークショップを年間通じて計5回実施しました。その際、幼稚園内と城南学園が地域活動の拠点としている駒川商店街とで開催し、一連の過程をアーティストとスタッフが深く観察することになりました。このように、初年度に

子どもがアートに触れる意味を深め、それをもっと企画に発展させた翌年、今年もそれらの価値を確かめる年となりました。

無限で夢幻な子どもの力

アートに触れる子どもたちは、言葉にならないものを各々の形で表そうとします。KMAでは1歳から9歳まで、つまり「ひとつからこのつまで、」の付く年齢の子どもたちが中心です。しかし、今年も単身で越えた地域の子どもも参加いたしました。無限のエネルギーを爆発させ、夢幻の世界に触れる子どもたちが、おとなたちが浸る世界をおとなも体験できるような工夫しました。

無限の力で触れる夢幻の世界がどういふものか、言葉で表現してみよう。水で書く書道、大きな絵巻に墨で描く絵画など「描く・書く」、糸紡ぎから行う織りのクラフト、水粘土で創る彫刻、下を向いた歩く指人形を作る工作など「作る・創る」、お寺にある仏具と声で奏でる音楽、言葉に様々な感情をのせる演劇、絵本から生まれる対話、リース鳩を飛ばしてみるワークと、飛べなくなったリース鳩のこれからを考える対話など「声／音／言葉／対話」、親子で「からだ」を考えるワーク、大豆ミートで作ら

会
Report

子どもの創造からの発見
色とりどりの表現に触れて

子どもがアートの触れる意味を深め、それをもっと企画に発展させた翌年、今年もそれらの価値を確かめる年となりました。

のスポーツコート音楽会にては、馴染みの打楽器を大勢の参加者が手にし、野村さんのピアノを中心に、野村さんやパドマ幼稚園と應典院に生まれ、おとな子どもが一体となる壮大な空間になりました。KMAは今後も関連企画が続く10月17日に幼稚園の砂場での対話のワークショップを行い、その内容は commonsフェスタ2016にて映像展示が行われる予定です。子どもとアートの世界から生まれる意味を、これからも丁寧に探らせます。



Interview

野村 誠さん

(作曲家)

音楽の概念を更新しつづける作曲家が、これまで歩んできた道程を振り返る。なんと、次なるチャレンジは中国語!?

音...



ライブやワークショップのみならず、NHK「あいのこ」出演や日本センチュリー交響楽団コミュニケーションプログラムで活躍されている作曲家・野村 誠さん。キッズ・ミート・アート2015（以下KMA）ではパドマ幼稚園を会場にして、野村さんを中心に広がる即興音楽の渦に誰もが惹き込まれた。音楽の力で多くの人を揺り動かす、そのエネルギーの源について伺った。



▲キッズ・ミート・アート2015 「ムムさんのスポーツコート音楽会」 (2015年8月29日パドマ幼稚園講堂にて)

「小学校三年生の時、ピアノの先生にバルトークの音楽を聞かせてもらいました。バルトークは100年前のハンガリーの作曲家で、周縁の地方の民謡を採集し、作曲に応用した人です。自分もこんな音楽がしたいと影響されて、勝手に作曲をはじめました。高校生になり、音大受験のためにある先生に会いに行つたのですが、「先生に直された曲にはなれない」と言われ、だったら独学でやろうと音大には進学しませんでした。

最後に今後挑戦したいことを伺ったところ、意外な答えが返ってきた。「今是中国語を勉強したいと思つてます。中国の人を悪く思わせる情報があるところがある気がして、アートをやるって人間として、世間をおかしく風向きとは逆に進みたいと思つています。観光に来てくれる人と会つた一言でも話しかけたら、中国語って音楽的じゃないですか、その感性を作曲に取り入れていきたいです。」

その後、国内で子どもとのワークショップを本格的に展開しはじめる。「NPO芸術家と子どもたちを立ち上げて、最初に授業の場でやらせてもらったのが2000年です。その時はほぼどろどろしたのが、120人も見学者が来ました。ここ15年で、日本も以前のイギリスの雰囲気になつてきましたね。僕自身は、音楽を通して新しいものが生まれてくる場に立ち会いたいという想いがあります。」

子どもがどんな音を出すか、これからは何が起こるのか分からない。一緒に立ち会おうことは、すごく素敵なことだと思つています。」 KMAについては、さらなる可能性を感じるといいます。「今回やって分かったのは、あんなに幼稚園の先生が参加してくれなかったこと。皆さん、楽しんでました！」と言つてくれました。事前に先生たちと準備しておけば、子どもたちが先生と一緒に演奏する演出もつくれますし、別の枠でチームごとに楽器をつくることもできる。KMAの他企画はあまり見れなかったですが、声明ワークショップも面白かったですね。ほとんど説明もないのに、参加者が歌つていて（笑）」

Column

アートは地域の資源



堀祥子(名古屋女子大学文学部講師)

1974年岐阜県生まれ。多摩美術大学美術学部彫刻科卒業、岐阜大学大学院で美術教育学及び幼児の造形を研究する。短大非常勤講師などを経て、2012年より現職。保育士及び教員養成に関わりながら、「手仕事とアート」をテーマに親子向け造形ワークショップや講演などを、東海地方を中心に学校や児童館および博物館等で行っている。また、地元岐阜にて開催される着地型観光イベント「長良川おんぼく」では、パートナーとしてプログラムを提供し、まちづくりに携わっている。

子どもにとって、非日常な場で出会うアーティストは、異界からの客人の様な存在なのでは? 應典院寺町倶楽部のそんな思いと実践例を伺ったのは、今年5月に開催された日本保育学会のシンポジウム会場でした。死を見据えながら生を問いなおす、檀家を持たない一風変わったお寺で開催された「キッズ・ミート・アート2015」にご縁頂き、足を運びました。

子どもたちのエネルギーは会場の隅々まで満ちて、圧倒される場面が続出。ラストの野村誠さんの音楽ワークショップでは、その場にいた全員がのびのびと感性と身体をひらいて、一つに融けて大

きなうねりとなったのを感じ、涙が出そうになりました。時間と場と創作活動を存分に遊び切る子どもたちの、言葉や行動の拡散と収束、または収束しなかったことも含めて、私も興味深い時間を共有することが出来ました。

日常と非日常の混ざりあう、いわば気水域にアートを置くことで、感性はきらめく光と水しぶきとなって表れては消えていく。子どもたちの本能はその美しさに気づき、遊びを何度も繰り返す、確かめ、味わおうとする。その心の柔らかさと力強さからは、現代社会の様相に対して既存の価値観や常識にとらわれることなく、創造的に立ち向かうエネ

ルギー源となる可能性と希望を感じます。近年、限られた物や場所を消費するだけの一過性の地域活性ではなく、そこに暮らす人々の日常こそ、その土地の最大無限の魅力的な資源であることに気づき始めた人たちが、小規模体験交流型プログラムを多数、短期間に開催するオンパイクという手法を編み出し、地域再生の手段として各地で行っています。大阪の寺町ではアートという資源が地域を育て、そこで育つ人が地域のかけがえのない「たからもの」となり、また新たなアートが生まれる。そんな素敵な循環が確かに存在することを、多くの人に知ってもらいたいと心から願います。

線